

Title	林海音『城南旧事』雑考：映画との比較の視点から
Sub Title	Lin Haiyin's Chengnan-jiushi as compared with its film version
Author	杉野, 元子(Sugino, Motoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1996
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.70, (1996. 6) ,p.39- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00700001-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

林海音『城南旧事』雑考

——映画との比較の視点から——

杉野元子

はじめに

林海音は、戦後間もない五〇年代初めから作品を発表し始め、その五〇年代半ばから六〇年代末にかけての時期に一番多く作品を書き残している台湾の女性作家である。標題に示した『城南旧事』は、林海音が一九六〇年、四二歳のとき、北京の城南で暮らした幼いころの日々を回想して書いたものでこの作家の代表作として知られている。この小説は自伝的色彩の濃い短編「惠安館」、「我們看海去（海を見に行こう）」、「蘭姨娘」、「驢打滾兒（ロバのころげ回り）」、「爸爸的花兒落了（お父さんの花が散った）」の五編で構成されているが、これら各編はそれぞれ独立した短編小説として味わうことができるとともに、主人公の少女英子が三年、七歳の時、父母とともに南の島台湾から古都北京へ移り住んできて、二九年に小学校を卒業するまでの六年間に体験した出来事を五つに区分し、年代順に執筆、構成された長編小説として読むことも可能である。

いっぽうこの小説は、八二年には海峡を越え、中国本土の上海映画製作所で呉貽弓監督の手により映画化され、中国国内はもとより、国際的にもきわめて高い評価（詳しくは本論の第三節で述べる）を受けるに至った。なぜこの台湾人作家の作品が、作品発表から二〇年以上も経過した八〇年代になり、本土中国の映画製作者の目にとまり、強く引きつけることになったのだろうか。そしてなぜその映画化された作品が国境を越えた世界各地で観客の心を広くとらえることになったのだろうか。

そこには『城南旧事』という作品が、五四文学革命以後八〇年代初めに到った本土中国の文学土壌の上では育ちにくかった特異な文学的特質を有していたということがあつたはずである。おそらくそこに、この小説が中国現代文学の潮流のなかでこの時期担った文学的役割の核心部分がある。

本稿では以上の問題意識にもとづいて『城南旧事』を論じることにするが、『城南旧事』が自伝的色彩の濃い作品であり、またこの作品の作り手がこれまで日本ではほとんど論じられてこなかった作家であることから、⁽¹⁾まずは林海音についてその経歴を簡単に紹介し、そのうえで、林海音が原作者として脚光を浴びることとなった映画『城南旧事』と原作との比較をおこない、両者の違いを検証することによって、『城南旧事』の文学作品としての現代的価値をも明らかにしたい。

なお以下の論中の表記についてことわっておくと、小説の『城南旧事』の場合は『城南旧事』、映画の場合は映画『城南旧事』と表記することとしたい。

一、林海音という作家

林海音（本名林含英）は一九一八年、日本の大阪で生まれた。幼い頃は『城南旧事』の主人公と同様に「英子」という日本の女の子のような名前と呼ばれていた。林海音の両親は台湾生まれで、父親の林煥文は祖先が広東省蕉嶺から台湾へ渡ってきた客家、母親の黃愛珍は祖先が福建省同安から渡ってきた閩南人である。二六年の台湾總督府の統計によると、当時の台湾における閩南人と客家人の人口比は、おおよそ閩南人が八五%で客家人が一五%であった。⁽²⁾閩南人と客家とは風俗習慣や言葉が大きく異なることから、当時は林海音の父母のように閩南人と客家が結婚するケースは珍しかった。

父親は一九〇九年に台湾總督府國語學校教師範部を卒業し、数年間公學校（台湾人子弟のための初等學校）の教師をしていたが、母親と結婚し、まもなくして新妻を連れて大阪へ行き商売を始める。そして大阪の地で林海音が生まれた。二〇年、父親が大阪での商売をあきらめたため、林海音はいったん両親の生まれ故郷である台湾に戻るが、二二年には両親に連れられて北京へ渡る。林海音四歳の時である。北京に移り住んだ当初、林海音は客家語、閩南語、日本語、北京語をまぜこぜにして使っていた。父親は最初日本人の経営する京津日日新聞社で働いていたが、ほどなくして転職、北京郵政總局の日本課長となる。二四年、林海音は国立師範大學付属小学に入学、三〇年には私立春明女子中学に入学、翌年父親が病死する。三四年、私立世界新聞専科學校に入学、卒業後は「世界日報」の記者となり、三九年、職場の同僚夏承楹（筆名何凡、著名なエッセイスト）と結婚する。林海音にとって北京とは幼年期から青春時代にかけての思い出がすべて埋め込まれている土地であり、終生忘れることのできない第二の故郷なのである。四八年、三児の母と

なつた林海音は二十六年間住み慣れた北京を去り台湾に移る。五三年から十年間に渡つて新聞「聯合報」の文芸欄の主編を務め、六七年には月刊文芸雑誌「純文学」を創刊、七二年まで発行を続ける。また純文学出版社を創設し、今も社長職にある。また林海音は編集者・出版者としての手腕を発揮する一方で、作家としても活躍し、現在までに『晩雲』（五九年）、『孟珠の旅程』（六七年）、『春風』（七一年）の三つの長編小説、『綠藻與鹹蛋』（五八年）、『城南旧事』（六〇年）、『婚姻的物語』（六三年）、『燭芯』（六五年）の四つの短編小説集、そして数多くの随筆を発表している。

二、「懷郷文学」としての『城南旧事』

林海音の作家としての活動が一番盛んだつたのは、五十年代から六十年代にかけての時期である。五〇年代の台湾文学界は四五年以降大陸から台湾へ来た外省人が前面に出て活躍していた。台湾土着の作家たちは、戦前日本語教育を受け、日本語で作品を書くことを強いられていたため、中国の北方語を基礎とした標準語が日本語に替わつて「国語」となつた戦後は、新たに標準語を学習しなければならないという大きなハンディキャップを背負わされたのである。しかし林海音は台湾籍の作家でありながら、四歳から三〇歳まで北京で暮らしていたので、言語的なハンディキャップを免れ、「国語」を自由自在に使いこなし、次々と作品を発表し続けた。

六〇年七月に出版された『城南旧事』には五編の短編小説の前に、「冬陽・童年・駱駝隊」という題の短い散文が収録されていて、作者が『城南旧事』を執筆するに到つた動機が述べられている。

夏が過ぎ、秋が過ぎると、冬がまたやって来て、駱駝隊もまたやって来た。でも幼年時代は二度と戻つてこない。冬の太陽のもとで、駱駝の咀嚼をまねるような愚かなことはもう二度とできないのだ。

しかし、幼いころ住んでいた北京の城南のあの風景と人々のことを私はどんなになつかしく思っていることか。私は自分にいい聞かせた。それらのことを書いてみよう、そして実際の幼年時代は過ぎ去ってしまったが、心の幼年時代は永久にとどめておこう、と。

このような思いから、私は「城南旧事」を書いた。

このような動機から生まれた作品『城南旧事』は、台湾では現在いわゆる「懷郷文学」の代表作として一般に認められている。たとえば陸士清は「台湾新文学運動縦覧」のなかで、五〇年代の台湾文学界の状況について次のように書いている。

これ（反共八股の氾濫を指す——筆者注）と同時に、「懷郷文学」が出現した。国民党当局が大陸を撤退したとき、大量の人員が国民党に従って台湾に来了。彼らは故郷の家や親兄弟・友人から離れ、他郷をさすらう旅人となった。台湾での生活が長くなればなるほど、故郷を思う気持ちも激しくなる。「懷郷文学」はこのような時代のなりゆきに応じて生まれてきた。特に何人かの女性作家たち、たとえば謝冰瑩、張秀亞、林海音、孟瑤、潘琦君、華嚴などは、そのほとんどが故郷を懐かしむ歌を作り、故郷に寄せる熱く切ない思いを吐露した。林海音の『城南旧事』はその中の代表作である。⁽³⁾

このように台湾では五〇年代、国民党当局とともに台湾に移ってきた文化人の手による「反共文学」と「懷郷文学」とが文壇の主流を占めており、『城南旧事』はこの「懷郷文学」ブームの流れの中から誕生した作品であった。しかし六〇年代以降は、「反共文学」や「懷郷文学」は次第に文壇から姿を消し、かわって西欧文学の理念や手法を学んだ「モダニズム文学」や台湾の郷土に根ざす「郷土文学」が台頭してくる。しかし「懷郷文学」の代表作『城南旧事』は

一九六〇年七月、光啓出版社から書き下ろして初版が発行され、六九年九月の第三版からは発行元が純文学出版社に移り、八三年六月にはさらに新しい版が作られ、純文学出版社版とは別に爾雅出版社からも発行されるようになった。いま筆者の手元にある九二年発行の純文学出版社版の奥付には六九年以来すでに十六版を重ねたことが記されている。このようにこの小説は、台湾で現在まで、とぎれることなく長きに渡って多くの人に読み継がれてきている。

いっぽう、すでに記したように『城南旧事』は八二年、中国本土の上海映画製作所で映画化された。映画『城南旧事』は、多くの人々から絶賛され、八二年度の金鶏賞を、呉貽弓が監督部門、宋媽を演じた鄭振瑤が助演女優部門、呂其明が音楽部門でそれぞれ獲得し、八三年には第二回マニラ国際映画祭のグランプリに輝いた。また八四年には第十四回ベオグラード国際児童映画祭最優秀映画思想賞を受賞し、八七年には中国国内で二十六万人の投票の結果、文革後十年間（七七年～八七年）に作られた映画ベストテンの中に選ばれた。これは映画それ自体が、国際的なレベルにおいてきわめて優れた作品であったことを明証するものだが、その脚本のもととなった原作『城南旧事』もまた、そのような絶賛を導き出す下地をなした作品としてその文学性があらためて注目を集めるようになった。次節以下で、評価を集めた映画（脚本は伊明が執筆）とこの小説を三つの視点から比較し、両者間に見られる異同の意味を具体的に考察するとともに、そこから浮かび上がってくる文学作品『城南旧事』の価値を明らかにしたい。

三、映画との比較の視点からみた『城南旧事』の文学性

①「蘭姨娘」の省略

小説は五つの短編小説で構成されているが、そのうちの三編は女性の生きざまが中心に描かれている。すなわち「恵

「安館」では恋人に去られ、その恋人との間にできた子どもとも生き別れになり精神を病んでしまう女性秀貞について、「蘭姨娘」では北京の花街で働いていて、施という年の離れた男に身請けされ、妾となったものの、その施家から飛び出し、英子（この小説の中心人物の少女）の家に身を寄せる女性蘭姨娘について、「驢打滾児」では働きの悪い夫にかわって一家を支えるために英子の家で乳母をしていたが、その間に息子は事故死し、娘は行方不明となる農村の女性宋媽のそれぞれの人生模様について描いている。林海音は女性作家が数少なかった五〇年代、六〇年代からすでに『曉雲』（五九年）、『金鯉魚的百欄裙』（六三年）に見られるような女性の問題を扱った数多くの佳作を執筆していることから、これまでも「台湾婚姻愛情小説の真の意味での開拓者」⁽⁴⁾、「台湾小説界で女性解放の呼びかけをおこなう基礎を築いた人」⁽⁵⁾などと評価されてきた。林海音はそうした評価に見合うように、『城南旧事』でも女性の描写に重点をおき、未婚の母となった秀貞、年の離れた男の妾となった蘭姨娘、怠け者で暴力を振るう夫をもった宋媽という三人の女性に多くの紙幅を割いて描いているのである。しかし映画の方ではこの三人のなかの蘭姨娘がまったく登場しない。このことは単に女性を描く場面が減ったという分量的な違いだけではなく、質的な違いを生じさせている。秀貞と宋媽は封建的な家族制度に縛られ、人生を翻弄されるが、蘭姨娘はこの家族制度の枠を飛び越し、大学生の徳先と自由恋愛をする。そして徳先の影響を受けて、愛読書は『二度梅』から『人形の家』へかわり、髪型も麻花髻から断髪へかわり、服装も旗袍を女学生風にアレンジしたものへとかわる。蘭姨娘は五四新文化運動後の新しい社会の空気に触発され生まれ変わった女性である。また「我們看海去」に描かれているダンスと音楽の教師韓先生も新時代の女性といえようが、映画では登場しない。映画では小説にある新しい時代への胎動を象徴する女性の存在が消されているのである。

② 台日関係と学生運動

『城南旧事』には当時の台日間^{たいかひかん}に存在していた軋轢^{えんりつ}を示唆するような箇所がある。小説の中で英子の父親は、日本人に対してかなり強い反感を抱いている。たとえば「惠安館」では母親が高熱を出した英子を見て、山本先生に往診に来てもらいましょうといったとき、父親は「あの小日本児など呼ぶ必要はない」と拒否する。また「爸爸的^{（7）}花児落了」でも父親は英子に日本の銀行での送金方法を教えるとき、日本人銀行員のことを「小日本児」という蔑称で呼んでいる。

では実際の著者の父親はどうだったのだろうか？ 日本統治下の台湾で教育を受け、大阪で暮らした経験もあり、さらに北京に来てからは初めは日本語の新聞社、次に郵政総局の日本課で働いていた著者の父親は、日本語に堪能な日本通であつたが、二二年に結成された北京台湾青年会の中心メンバーの一人でもあつた。この北京台湾青年会とは、「会報を発行し、島内文化協会員と連絡して当時の民族主義啓蒙運動及台湾議會設置請願運動を支持し、当時の北京大学教授^{（8）}元培以下新進教授学徒の影響を受けて之を島内に反映し、屢々不穩なる文書を刊行して、島内及東京同志に頒布し、台湾議會期成同盟会の検査さるゝや、華北台湾人大会を開催し反対運動を行ひたり」という組織だつた。そして北京台湾青年会が開催した華北台湾人大会では、「我等華北台湾人大会は已に全体決議し、実力を用ひて貧弱にして幼稚なる台湾民選議會請願団及其の期成同盟を援助し、諸先鋒をして猛烈にして暴動の大衆運動に進め、彼等と協力して日本帝国の悪辣なる政治を世界に暴露し、各地の同志と連絡合同し一切の強権を推翻し、一切の不自然なる制度を打破すべし」という宣言が出された。この内容がそのまま著者の父親の考えであるとは限らないにしても、この宣言にかなりの程度において同調していたことは間違いないであらう。

また「爸爸的花児落了」には「父は今年、庭の大きな鉢に植えてあるザクロと夾竹桃に油かすをやらなかつた。叔父が日本人に殺されたのがショックで血を吐いてしまったのだ」という箇所がある。叔父の死についてはこれ以上何も触

れられていないが、これは実際に起きたことである。林海音の「番薯人」によれば、父親の一番下の弟は当時北京に来て、父親と同じように郵便局で働いていたのだが、ひそかに朝鮮人といっしょに抗日運動をしていた。そして朝鮮人の代わりに、お金を運ぶために南満州鉄道の列車に乗っていたとき、大連で日本人に検挙され、暴行を受けたあけく牢獄内で死亡したため、父親は弟の死体を引き取りにいき、その後まもなく血を吐いて倒れ、四四歳の若さで病死する。

このように『城南旧事』では台湾人である英子の父親の日本人に対する反感や日本人との摩擦について触れた箇所があるのだが、これは映画ではすべて削られている。そしてその一方で映画では英子の父親と学生生活家との結びつきがより強く鮮明になっている。小説では英子の父親は当局の目を逃れるために避難してきた大学生の徳先を家にかくまうということが書かれていたが、映画では徳先が登場しないのでそのような場面がないかわりに、小説にはない英子の父親が惠安館へ行き、その大学生と何やら密談を始めるという場面や、最近いたところで学生が捕まっているのに、父親があいかわらず惠安館へ行き学生の相談相手になっていることを心配する母親に対して、父親があの学生たちは見所のある新青年なんだからと言うという場面があり、父親が積極的に自ら足を運んで学生生活家との接触をおこなっているように描かれているのである。また父親が逮捕を逃れるために北京以外の土地へ旅立つ決心を伝えにきた二人の学生に旅費を援助するという場面、そしてさらには父親の墓参りを終えた英子一家と宋媽がわかれてそれぞれ帰路につくとき、二人の男子学生と一人の女子学生が突然あらわれ、父親の墓の前に立って紅葉したもみじを束ねたものを献げるという場面があるが、これらも小説にはないものである。

小説に描かれている父親は、徳先のような学生生活家にとってはいき理解者だったが、妻にとっては日本では一晩中花街で芸者をはべらせて酒を飲み歩き、北京では家で阿片を吸ったり、家に居候させている蘭姨娘に恋心を寄せたり

と、けつして欠点のまったくない理想的な夫ではなかった。ところが映画の父親は進歩的學生を積極的に支援し、また彼ら學生から深く敬愛されている高潔な知識人として描かれていて、小説に書かれている夫としての欠点については一切触れられていない。小説の父親は多様な側面を持っていたが、映画の父親はマイナスイメージが抜き去られた結果、大陸の小説・映画に数多く登場する進歩的知識人のステレオタイプにすっぽりはまってしまうものになってしまっている。

さて父親とは関係していないが、もう一つ學生運動に関連して、小説と映画とのあいだには大きな違いがある。小説では秀貞の恋人思康は、田舎の母親が病氣になったという知らせを受けて、田舎に戻ったまま帰って来なかったとある。思康は母親から母親の眼鏡にかなった地元的女性との結婚を勧められ、断れずに秀貞を捨ててしまったのかもしれない。具体的なことは書かれてないが、文脈から、封建的結婚制度が二人の間に立ちほだかり、二人を破局へと導いたことが感じとれるようになっていいる。しかし映画では夜中に大勢の人が恵安館にやってきて、思康をも含めた何人もの學生を連れ去ったかたちになっており、当時の學生運動に対する為政者側からの厳しい弾圧をほのめかすものになっている。このような小説から映画への脚本上の変更について陸士清は次のように指摘している。

このようにして、旧軍閥が革命を鎮圧するという重大な社会闘争は、悲劇的人物の運命と直接的に結びついた。そして思康というこの直接顔を出さない人物に大時代の息吹きを与えたのみならず、秀貞の悲劇に時代的色彩を強めることもなり、もはや封建倫理道德と世俗觀念がもたらした普通の悲劇ではなく、大變動を起こしつつある旧中国の時代の悲劇となった。これは原作からの昇華である。⁽⁹⁾

しかし林海音がこの作品に意図していたのはまさにその「封建倫理道德と世俗觀念がもたらした普通の悲劇」を書く

ことであった。林海音は「大変動を起こしつつある旧中国の時代の悲劇」を書くことが作品の質を高めることにつながるなどと考えてはいなかったのである。林海音は『城南旧事』が映画化されたあとに次のような文を書いている。

中共は小説『城南旧事』について、作者は「一般労働人民の不幸な遭遇」や「北洋軍閥時代の人民の苦境」を表現するために書いたといつも強調している。(中略) 実際には私はこれらのために書いたのではない。私はものを書くとき、これまで一度も「政治が優先」ということをおこなったこともないし、また「革命」を高らかに叫んだこともない。この小説は愚かな童心のまなざしで、記憶に深く残っている人物と物語を書いたのである。(中略) 私は女性と子どもを書くのが好きだ。私は婚姻の衝突や新旧の時代の恋愛を書くのが好きだ。私は女性なのだから、当然これらのことを書くのが好きだし、またこれらのことを書く能力もある。偏った考えを私の作品に注入するようなことはけっしてほしくない。¹⁰⁾

前述したように林海音は『城南旧事』のなかで父親の日本人に対する反感や父親の弟と日本人との間で起きた不幸な出来事について触れてはいるが、それは気を付けなければ読み飛ばしてしまうような箇所、さりげなく書かれているにすぎない。また徳先がどのような活動を行ったため、当局から追われる身になったのかについても具体的なことにはなにも語られていない。さらに林海音は「番薯人」のなかで、当時大陸の中国人は台湾人に対して排他的であったと書いているが、¹¹⁾『城南旧事』のなかでは当時林海音一家が経験したであろう大陸の中国人との摩擦についても触れられていない。このように林海音は「ものを書くとき、これまで一度も『政治が優先』ということをおこなったこともないし、また『革命』を高らかに叫んだこともない」作家であり、『城南旧事』は「愚かな童心のまなざしで、記憶に深く残っている人物と物語を書いた」小説なのである。その点が、映画では「旧軍閥が革命を鎮圧するという重大な社会闘争」

が「悲劇的人物の運命と直接的に結びつ」くように改変され、「思康というこの直接顔を出さない人物に大時代の息吹きを与え」、「秀貞の悲劇に時代的色彩を強める」ように内容が変えられている。

③「京味」

現在中国には「京味小説」と呼ばれる小説の一群がある。これは文革のあとに誕生したジャンルで、代表的作家としては老舎、鄧友梅、劉心武、韓少華、汪曾祺、陳建功などの名前が挙げられる。また小説の他にも「京味話劇」、「京味電影」、「京味電視劇」が盛んに創られている。「京味小説」は「味」という字が含まれていることからわかるように、それを細かく具体的に定義することはむずかしく、それが「京味小説」でそれがそうでないかは味わう人によって判断が微妙にずれてくるのだが、「京味小説」の平均像とは、北京それも主に下町を舞台とし、北京の四季折々の風景・風物の描写、北京の風俗習慣についての言及、そして生粋の北京人の口から飛び出す北京方言をスパイスとして盛り込み、そこに暮らす人々の世態人情を描いたものである。そしてこの「京味小説」の最高峰ともくされているのが、作家老舎の手によって生まれた作品群、たとえば『駱駝祥子』（三六年）、『四世同堂』（四四年～四九年）などである。老舎以前の文学者も現実の「北京」から豊かな文学的感性を引き出し、それを作品のなかの「北京」に投影させていたが、「北京」を神話にまで変容させるのには、老舎の力が大きかった。老舎の作品が生み出した想像の空間「北京」は、その後の文学者が北京を描くときのモデルとなり、文革後登場してきた「京味小説」の書き手たちもその多くは、老舎を元祖として意識し、老舎から強い影響を受けている。

さて『城南旧事』も味の濃さについては人により判断が分かれるであろうが、まさしく「京味」が醸し出されている小説といえよう。北京の伝統的な住居「四合院」での暮らしの様子、そして両側を「四合院」の外壁で挟まれた北京独

特の空間「胡同」を舞台として、その「胡同」に活気と変化をもたらす子どもたちの遊ぶ姿や物売りの姿や「井窩子」で働く人夫の姿が描かれている。また「半空児」、「羊頭肉」、「凍柿子」などの北京の寒い冬に楽しむ代表的な食べ物の名前や「西鶴年堂」、「瑞蚨祥」といった北京の老舗の名前、「天橋」、「城南遊芸園」、「八大胡同」の「韓家潭」、「胭脂胡同」などの城南の代表的な地名も登場する。そしてとりわけ「京味」として鮮明な印象を与えるものとして駱駝隊がある。「駱駝隊がやってきて、わが家の門の前に止まった」という一文で始まる林海音の散文「冬陽・童年・駱駝隊」には駱駝隊にまつわる幼い日の思い出が綴られている。

台湾から来た少女英子にとって駱駝とは砂漠にいる動物というイメージでしかなかったに違いない。その駱駝が都会の真ん中をのそのそと歩いているのだから、英子はさぞかし驚いたことだろう。英子は駱駝の咀嚼する様子をまねて自分の歯を動かしたり、父親になぜ駱駝の首には鈴がつけられているのか訊ねたり、母親に駱駝は夏になるとどこへ行ってしまふのか訊ねたりする。しかし北京に着いた当初は物珍しくて英子の好奇心をかきたてた駱駝も長く暮らすうちに北京の冬に欠くことのできない存在として受けとめられるようになる。林海音は「冬陽・童年・駱駝隊」のなかで「私は黙々と考え、少しずつ書いた。冬の太陽の下を駱駝隊が歩いてくるのが見え、ゆっくりと鳴るこちよい鈴の音が聞こえ、幼年時代のことが再び心に浮かんできた」と書いているが、林海音にとって北京の風景として最初に思い浮かぶものは「京味小説」の定番である四合院、胡同、城壁、城門ではなく、「砂漠の船」駱駝なのである。

『城南旧事』を読むと、時代背景となっている二〇年代の北京の街には駱駝以外にもさまざまな交通・運搬手段が使われていた様子が窺える。雨の降る夜、北京発天津行きの汽車に乘ろうとして正陽門にある駅を目指して走り去った惠安館の狂女秀貞と大道芸人の少女妞兒は汽車にひき殺される。病院で十日間も昏睡し続けた英子は、元気になって退院

するとき、両親といっしょに馬車に乗って家路につく。ダンスと音楽の教師韓先生は校庭で当時大流行していた自転車
の練習をする。「黄板牙児」は田舎みやげのナツメや落花生の入った大きな麻袋を背中に下げたロバにまたがって宋媽
に会いに来る。大雨の日の朝学校に行くのをなまけようとして父親からお仕置きされた英子は父親からお金をもらい初
めて人力車で登校する。

駱駝・ロバ・馬車・人力車・自転車・汽車という原始的なものから近代のものまでが混在していた二〇年代の北京
は、まさに近代化への過渡期にあったといえよう。しかし林海音が駱駝隊の映っている写真を自ら選んで純文学出版社
版の表紙に使っていることからわかるように、林海音にとってこれら多種多様の交通・運搬手段のなかでもっとも原
始的な駱駝こそが北京のシンボルであった。

ところで『城南旧事』は前述したような「京味」を含んでいるものの、「京味小説」の枠内にはおさまりきらない小
説である。つまり『城南旧事』は「京味」一色に染まっているわけではなく、「京味」にはそぐわない「味」も混ざっ
ているのである。そしてこの味こそが老舎の作品を頂点とする「京味小説」にはない、林海音ならではの作品の味なの
だといえよう。

『城南旧事』が「京味小説」とは認められない決定的な要因として、北京人の不在ということが挙げられる。「京味小
説」には北京生まれ北京育ちの生粋の北京人が主役または準主役級で登場するものが多い。たとえば老舎の小説『離
婚』（三三年）には典型化された次のような北京人張大哥が準主役で登場する。

張大哥は北平人以外はことごとく田舎者だときめている。天津、漢口、上海はもちろん、パリでもロンドンでも例
外なくすべて田舎である。張大哥の知っている山といえば西山だけで、北山から果物売りが来ると聞くと、どこか

神秘的で得体が知れないという感じを抱く。最も遠くまで行つた旅行といえは、永定門の少しさきまでである。

(中略) 彼は海を見たことがないが、また見ようとも思わない。世界の中心は北京なのだ。⁽¹²⁾

このように「京味小説」の作者の多くが、北京人の形象を通して、北京人に特徴的に見られる思考方法や行動パターンを読者に伝えることをもくろむのだが、『城南旧事』では生粋の北京人があまり登場せず、北京以外の場所から来た人々が中心に据えられている。英子の一家と徳先は台湾出身、宋媽は河北省順義の出身、蘭姨娘は蘇州出身、そして狂女の恋人思康は福建省惠安の出身である。また惠安館の管理人の老王も北京郊外の海甸で生まれ育ち、大人になってから北京城内に移ってきたので、生粋の北京人ではないし、草むらにいた泥棒はその出自がはっきり書かれていない。生粋の北京人の可能性が高いのは、清王朝の禄を食んでいたと思われる娼兒の養父であるが、この養父は脇役でしかなく、小説の中で占める比重は高くない。さらに登場人物に生粋の北京人が少ないということから当然生じる結果であるが、『城南旧事』には「京味」を出すのに欠かすことのできないスパイスである北京方言が使われている場面がほとんどない。英子の回りでは客家語なまりの北京語や閩南語なまりの北京語や順義なまりの北京語や蘇州なまりの北京語が飛び交っていた。

『城南旧事』は北京の下町に暮らす人々の人生模様を描いてはいるものの、その人々の大半は、城壁と四合院の外壁という二重の壁で囲まれた閉鎖的な空間に住み、爛熟した古都の文化を継承し体現する土着の北京人ではなく、各地から流入した多様な地方色に染まった人たちなのである。そして思康、徳先、蘭姨娘、宋媽といった地方出身者は北京には定住せずに、各地へ散らばっていく。また英子一家も北京で居所を一カ所に定めずに、何度も引っ越しを繰り返す。その結果この作品は土着の北京人が多く登場する「京味小説」に見られるような一元的な統一感と安定感に支えられた

テキストでなく、流動的で多元的な要素を含んだテキストとなっている。

そしてその意味において惠安館は象徴的な場所である。狂女の父親が管理人をしていた惠安館は、福建省惠安から上京してきた大学生が暮らす宿泊施設である。会館とは、北京における同郷人の宿泊・集会施設であり、もともと科挙の試験を受けにきた受験生に無料で宿泊場所を提供し、その滞在費を節約させるために造られた。清代になって内城に会館を建てるのが禁止されたため、会館は外城、つまり城南に集中するようになり、その数は清末には五百余りを数えた。そして清末に科挙制度が廃止され、受験のために上京する者がいなくなると、会館は単身赴任の中央官吏や大学生が住む場所へと変わった。同郷人が集まりその土地の言葉が飛び交う会館とは北京における各地方文化保護区であり、北京における文化の交流・融合と多様化の推進基地となっていたのである。

*

さて次に映画についてであるが、映画では四合院での生活風景や物売りが行き交い、水汲み人夫が「井窩子」で忙しく働く胡同の風景がたびたび映し出される。また北京で過ごした幼い日の思い出として林海音の脳裏にもっとも鮮明な像を結んでいた駱駝隊も、映画の冒頭で登場する。映画は原作に書かれている「京味」の風景をかなり忠実に再現しているといえよう。

しかし人物像は映画と小説とは大きく違っている。小説では主な登場人物のほとんどが地方出身者で占められているが、映画では台湾出身の徳先と蘇州出身の蘭姨娘は登場しない。また小説では英子の父親は台湾出身の客家、母親は台湾出身の閩南人であるということが、いろいろな場面で何度もはつきりとわかるように書き込まれている。たとえば小説には父親が客家料理をうまくつくれない母親に不満をぶつけるという場面や父親と母親がそれぞれ自分の方言を口

にする場面があるし、「惠安館」と北京語で発音することができず、父親は「飛安館」、母親は「灰娃館」という発音になってしまったということも言及されている。しかし映画では、英子の父親が客家であり母親が閩南人であるということについては一切触れられていないし、英子一家が台湾出身であることについても、最初の方で英子が姪児に私の家族は台湾からやってきたと話す場面と最後に台湾義地と刻まれた標識が立っている土地に父親が葬られる場面を除いては、まったく言及されていない。映画では英子一家の台湾色が非常に薄いのである。そしてそのことを決定的にしているのが、両親が客家語なまりも閩南語なまりもまったくない標準語を話しているということである。

小説では北京人ではなく地方出身者が中心に据えられ、地方色が豊かであったため、「京味小説」の風格にはそぐわないものとなっていたが、映画では徳先も蘭姨娘も登場しないし、英子一家の台湾色も小説よりずっと薄められている。そして宋媽も小説では惠安を「惠難」と発音していたが、映画では北京方言も時おり混ぜた流暢な標準語を操っている。つまり映画は小説にあった「京味」にそぐわない地方色がそぎ落とされており、その結果「京味電影」としての風格を充分感じさせるものへと変容しているのである。⁽¹³⁾

おわりに

これまで『城南旧事』と映画『城南旧事』の相違点についてみてきたが、小説と映画の違いとしては、映画では、蘭姨娘、韓先生という新しい女の存在、徳先という地方出身者の存在が削り取られており、英子一家が台湾出身であることもあまり意識させないようになっていた。また父親が日本人とかかわる場面がまったくない一方で、父親と学生活動家との深いつながりを示唆する場面が増え、進歩的知識人としての父親像のステレオタイプ化がおこなわれていた。

いっぽう小説と映画との共通点は、「京味」を感じさせる二〇年代の北京の胡同を舞台とした人々の生活風景が、まるで目の前に浮かぶように生き生きと描かれていることである。北京は今では城壁が取り壊され、人力車や駱駝も見かけなくなり、四合院は次々に高層アパートや高層ビルに姿を変えつつある。この七〇年くらいの間に北京の街並みやその景観は驚くほど大きな変貌をとげた。しかし東京が見かけの上でいかに人工都市に一変しようとも、多くの日本人が今の東京を歩きながら、そこにわずかに残されている江戸の面影を探し求めたり、あるいは書物や絵画や映像などで江戸にゆかりの情報を収集し、そのイメージをふくらましたりすることに飽きぬ魅力を感じるのと同じように、中国の人々も首都北京がいかに変貌しようとも、城壁と城門があり、四合院を家とし、胡同に物売りの呼び声が響きわたっていたころの、古い北京に対する愛着や憧憬を捨てきれないものである。だからこそこの物語が八二年に映画化された時、人々は自分の心の中にひっそり眠っていた北京の原風景が映像の中で再現されたのを喜び、惜しめない拍手を送ったのである。

しかし映画『城南旧事』が八十年代初めに中国人に大きな感動をもたらした原因は単にそれだけでなく、純真で無垢な英子という子どもの眼を通して描かれている世界、すなわち英子とその回りにいる人々の心温まる触れ合いの姿が、政治運動に明け暮れ、すっかり荒廃しきった人々の心にじわっと慈雨のように滲みいったからでもある。わけても貧しい田舎の婦人宋媽が英子たち兄弟に接する態度は、使用人という立場を乗り越えた深い愛情を感じさせるものとなっている。

五四文学革命以後誕生した中国の新文学はその多くが社会の変革とか国民性の改造という強い使命感に裏打ちされており、また共産党が政権をとってからは、改革・開放政策のもとで政治的締め付けがゆるむ八〇年代に入る前まで、文

学は政治に従属することを厳しく要求された。その結果時には魯迅の『阿Q正伝』（二十一年―二十二年）のような世界に誇れる作品も誕生するが、説教臭さが鼻についたり、メッセーシ性が強かったりして、文学性に欠ける作品も量産されるという事態を生んだ。しかし台湾の作家林海音が書いた『城南旧事』は子どもの視点で子どもの目に映った世界をそのままの形で伝えており、作者が啓蒙者として作品に顔を出すこともないし、また政治色やイデオロギー色も極めて希薄である。

魯迅は『狂人日記』（二八年）の末尾で、狂人に「人間を食ったことのない子どもは、まだいるかも知れぬ？ 子どもを救え」と訴えさせているが、この訴えは半世紀以上たって、文革による傷痕を描いた「傷痕文学」の代表作といわれる劉心武の作品『班主任』（七七年）のなかで、クラス担任張先生の「四人組」に痛めつけられた子どもを救わなくては！⁽¹⁵⁾ という言葉となつて繰り返される。われわれが「子ども」を救うためには、なによりもまずわれわれが子ども⁽¹⁴⁾の視座を回復し、われわれ自身の世界の歪みを総点検し、それを修正することから始めなくてはならないのではないだろうか。『城南旧事』と映画『城南旧事』はともに読者あるいは観客に城壁ありしころの北京への懐旧の念をもよおせるとともに、童心というものの尊さに気づかせ、われわれに子ども⁽¹⁵⁾のまなざしをとりもどすきっかけを与えるものとなっている。そのことによってこの作品は、居並ぶ多くの台湾「懐郷文学」や大陸の「京味電影」のなかでもひとときわ異彩を放ち、われわれにいつまでも消えやらぬ古典的な余韻と深い感動を与える作品となっているのである。

注

(1) 日本人による林海音に関する論考は、管見の限りではわずかに中下正治の「林海音『城南旧事』考」（『台湾文学研究会

会報」第十三、十四合併号、八八年一二月）があるのみである。この論考は「惠安館」のなかで母親が往診を頼もうとした山本医師とは魯迅や周作人一家が診察を頼んだ西城旧刑部街の山本医院の山本忠孝である可能性が高いことを指摘するなど示唆に富むものであるが、紙幅がわずか四枚しかなく、また内容も作品の舞台となった場所を实地調査した結果が中心となっているため、作品の評価にまで踏み込んだものとはなっていない。日本における林海音研究がこうした現状にあることを指摘しておく。

(2) 台湾總督府官房調査課『台湾在籍漢民族郷貫別調査』（台北、二八年、四一五頁）

(3) 陸士清『台湾新文学運動縦覧』（『台湾文学新論』、復旦大学出版社、九三年、三七頁）

(4) 古繼堂『台湾小説發展史』（春風文芸出版社・遼寧教育出版社、八九年、二五七頁）

(5) 趙朕『女性小説：異曲同工的和鳴——海峽兩岸小説比較』（『文学評論』第三期、九一年五月、一二五頁）

(6) 台湾總督府警務局編『台湾社会運動史（台湾總督府警察沿革誌第二編 領台以後の治安状況中巻）』（台北、三九年、九二頁）

(7) 同右、九四頁

(8) 林海音「番薯人」（『家住書坊辺』、純文学出版社、八七年、八一頁、もと「中国時報」人間副刊、八四年七月二六日）

(9) 陸士清『城南旧事』從小説到電影」（『台湾文学新論』、復旦大学出版社、九三年、三〇五頁）

(10) 林海音「童心愚駭——回憶写『城南旧事』」（『家住書坊辺』、純文学出版社、八七年、一〇五頁、もと「中国時報」人間副刊、八三年二月六日）

(11) 林海音は「番薯人」（『家住書坊辺』、純文学出版社、八七年、四頁、もと「中国時報」人間副刊、八四年七月二六日）のなかで、「台湾人は日本に不法占拠された故郷を遠く離れて祖国に身を投じたとき、大部分が本籍として自分たちの原籍である閩、広両省の名前を書いた。私は小学校で勉強していたときは、父親の原籍である広東蕉嶺と書き、父親が死んだあとは私たちの本籍は母親の原籍である福建同安へと改められた。このようにするのは、一つには北京の日本領事館などの機関の注意をのがれるためで、もう一つには祖国の人の前で、もし台湾人といったならば、異様な視線を投げかけられる可能性があったからである」と書いている。

(12) 老舍『離婚』（上海良友圖書公司、三三年、五頁）

- (13) 解璽章・金汕は共著の論文「走出大雑院小胡同——京味影視芻議」(『北京文学地域特色研究』、北京燕山出版社、九〇年、一九九〇頁)のなかで、「京味影視」の代表作として、映画化、テレビドラマ化された老舎の作品群とともに映画『城南旧事』の名前を挙げている。
- (14) 魯迅『狂人日記』(『新青年』第四卷第五号、一八年五月、四二四頁)
- (15) 劉心武『班主任』(『人民文学』第十一期、七七年十一月、二四頁)